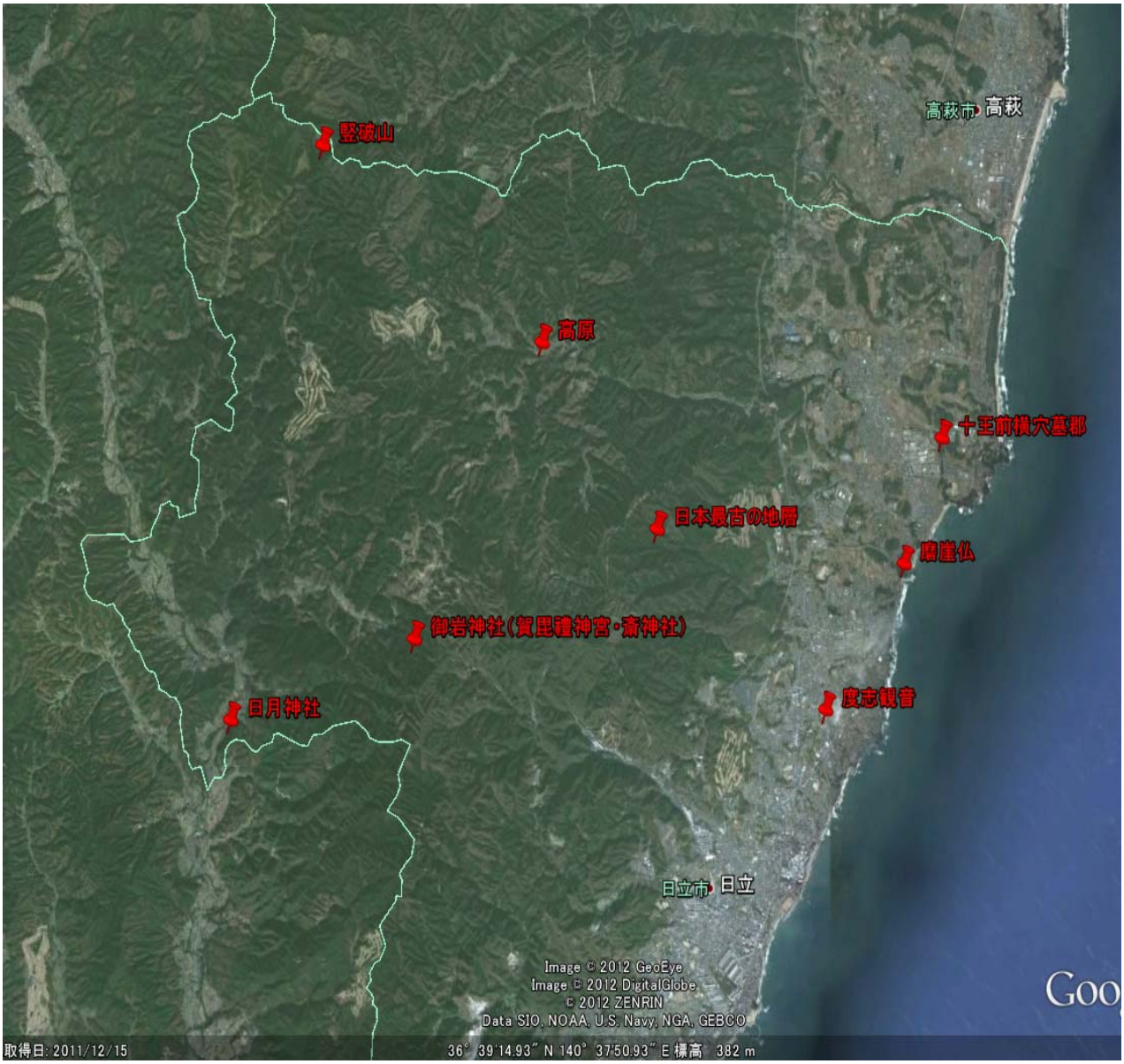
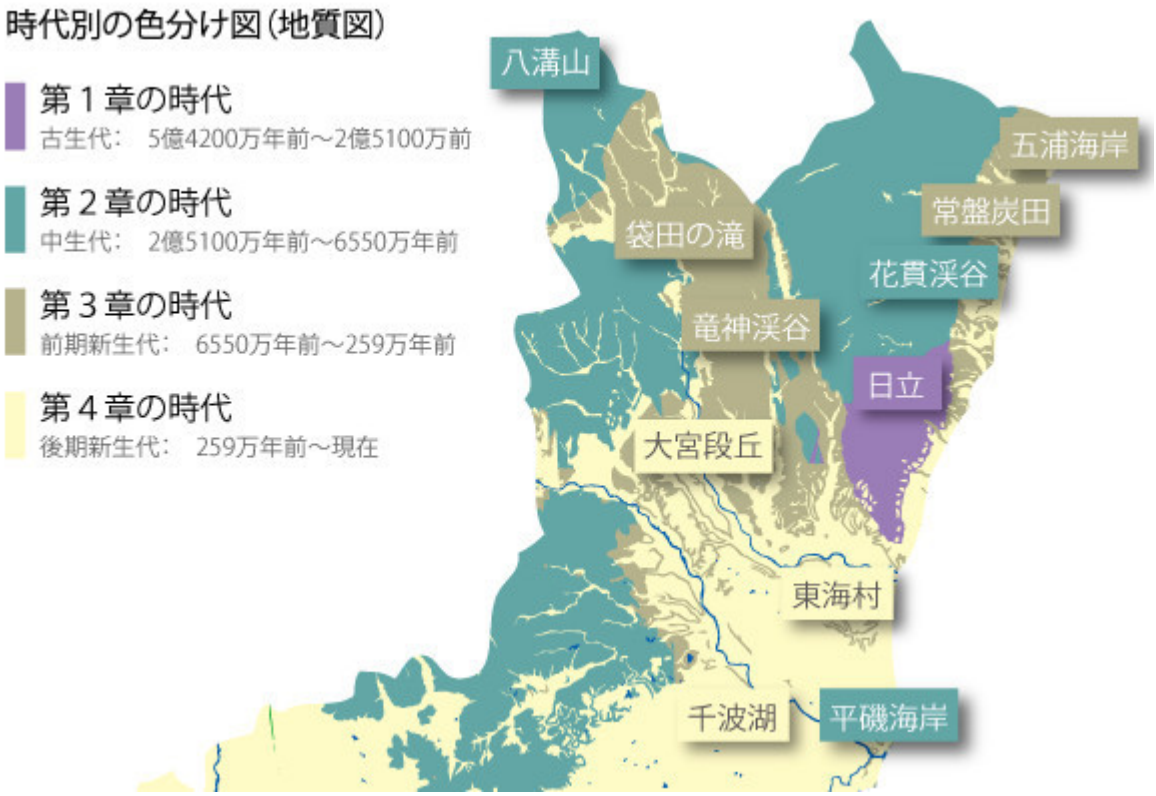
常陸国（北部）多珂郡の歴史



海老沢　貴志

地質学的歴史

茨城県北ジオパーク（http://www.ibaraki-geopark.com/茨城県北ジオパークとは/）



日本最古の地層(日立市小木津町)

日本に存在する最古の地層である、約5億年前のカンブリア紀の地層（東連津川上流部で、この地層を見ることができます）

また、この茨城県北の地下には、神の名がついた未知のプレート（イザナギプレート）があるという学説もある。

小木津石

東連津川流域には小木津石という名前の堆積岩（水成岩）があります。表面の凹凸はほかに類を見ません。岩質は非常に硬く、 加工には不向きです。

靖国神社の庭の池には全国の有名な石が集められていますが、その中に小木津石も含まれています。

第１章：５億年前の世界

常陸の国は、5億年前にゴンドワナ大陸の東の縁に火山弧として誕生しました。その後、大陸の一部となった時期や、海面下に沈んだ時期がありました。

第２章：２億４０００万年前の世界

新しい大陸パンゲアの一部となりました。パンゲア大陸の縁に、海底の移動にともなって運ばれてきた堆積物と陸から運ばれてきた岩石や堆積物がかき寄せられて張り付きました。 これらのうち、あるものは地下深く高い圧力と温度のもとに変形して、日本列島の土台となりました。

第３章：２０００万年前の世界

現在の地形から作られてはじめての時代です。この時代に日本列島は大陸から切り離され、現在のような形になりました。

第４章：現在の世界

地球の気候変動にともなって海面が上下し、その結果、現在の特徴的な地形が形成されました。

文献による歴史

1.常陸風土記（十一、多珂郡 「薦枕、多珂の国」）

昔、志賀の高穴穂宮に大八洲知し食しし天皇（成務天皇）の御世に、建御狭日命（たてみさひのみこと）が多珂の国造として赴任した。建御狭日命は、国を巡り見て、山が険しく高いので、多珂国（たかこく）と名づけた。建御狭日命は出雲臣と同族である。諺に「薦枕、多珂の国」といふ。

このとき、郡の境界を定め、南（道前）は久慈郡の境の助川、北（道後）は陸奥国石城郡苦麻之村までとした。のち難波の長柄の豊前宮に天の下知し食しし天皇（孝徳天皇）の御世の癸丑の年に、多珂の国造・石城直美夜部、石城の評造部・志許赤らが、惣領の高向大夫に申し出て、この郡は範囲が広すぎて行き来に不便なので、多珂と石城の二つの郡に分割された。石城郡は、今は陸奥国に属す。

南（道前）の里に、飽田の村がある。むかし倭建の天皇が東国を巡られたときに、この野で宿をとられた。ここの村人がいふには、野には無数の鹿が群れ、その角は枯れた葦の原のようで、息は朝霧の立つようだ。海には八尺の鰒がいて、その他の珍味や、鯉もいるという。そこで天皇は野に出て、また橘皇后は海に出て、野と海で獲物の幸を競うことになった。天皇の野での狩りには何も獲れなかったが、皇后の海では大漁だった。天皇は「野のものは得ずとも、海のものは飽きるほどだ」といはれたので、後に**飽田村**（現：日立市相田町付近）と名づけられた。

国宰の川原宿禰黒麻呂のとき、海辺の岩壁に**観世音菩薩**の像を作った。それにより**仏浜**といふ。

郡家の南へ三十里のところに、藻嶋の駅がある。東南の浜に玉のような碁石がある。常陸の国では最も美しい石である。むかし倭建の天皇が船で島の磯廻をされたとき、「種々の海藻が多いところだ」といはれたので、藻嶋の名が付いた。

◇常陸国多珂群周辺に残る遺跡◇

仏ヶ浜「度志観音」（日立市田尻町）

「常陸国風土記」の多珂郡の条には、「国宰川原宿禰黒麿の時に、大海の海辺の石壁に、観世音菩薩の像を彫った。今ものこっている。これによって仏の浜となづけた」と記されています。この観世音菩薩の像を彫ったところが、田尻小学校西側の崖のところにあたるとして、1955（昭和30）年に史跡仏ケ浜として県の指定を受けています。金色姫の伝説は、この神社以外につくば市の蚕影神社、鹿島郡神栖町の蚕霊神社にも伝えられています。

磨崖仏(小木津浜の十二体観世音、岩地蔵)

小木津浜から東連津橋を渡ると正面に、幾体かの仏像が岩肌に彫られています。土地の人は岩地蔵と呼んでいます。かつては12体の仏像が数えられたといいますが、天保時代の小木津村絵図では5体（図の中央の白色の仏像群。下側が小木津浜）が、また今ではわずかに2－3体ほどが見えるだけです。その前をかつて陸前浜街道（岩城相馬街道）が通り、峠道へと続いていました。このような磨崖仏は、近隣には田尻町度志観音、折笠町新旗観音などがあります。常陸風土記の「仏の浜の観音」は度志観音であるというのが定説ですが、地理的な位置（海辺の岩壁に・・・）からこの岩地蔵あたりとする説もあります。

竪破山（日立市十王町黒坂）

もとは角枯山（つのかれやま）と呼んだ。紀元前 80 年頃、蝦夷の征服に出征していた黒坂命（くろさかのみこと）がこの地で病気になって死んで以来、黒前山と呼ぶようになった（『常陸国風土記』、茨城郡の条）。江戸時代になって、八幡太郎源義家の故事にちなんだ岩に、西山公水戸光圀が「太刀割石（たちわれいし）」と名づけた。この名前からこの山を竪割山、竪破山と呼ぶようになった、とされている

十王前横穴墓群

十王前横穴墓群（通称：かんぶり穴）は十王川に面する丘陵の西斜面にあり、29基の横穴墓が確認されています。

装飾横穴墓や装飾古墳は、九州地方に数多く分布しており、この横穴墓群も、九州地方との関連性が考えられている。

2.古史通による常陸国

古史通とは･･･**新井白石**の著作による古代史解釈の書。四巻、1716 年（享保元年）成立。古代の神々を人として歴史的立場から資料を精査しながら、合理的に事実を捉えようとする姿勢がみられる。

巻頭で記紀を読み解く場合の基本的姿勢を開陳している。古語は漢字の音(おん)を利用して書きとめたのが昔の書物であるので、文字の音によりその意味や内容を読み取るべきであるとする。

本文は四巻構成である。

第一巻

巻頭で神は人なり。と説き、かつ、高天原は常陸国だとしている独特の見解を示した。次に国産みと神々の誕生を記し、スサノオの追放までをのべている。

第二巻

高天原神話から出雲神話へ、ここでは、天の岩戸から大国主命の話がかかれている。

第三巻

天孫降臨と国譲りについて。

第四巻

神武天皇の出自を明らかにしている。

林羅山等の儒者は、当時の倭人の祖は、古代中国の呉の王である太白の子孫と考えていた。また釈日本紀の（卜部兼方）や一条兼良といった神道の立場の学者は、神は万物の宇宙の根源であり、高天原は虚空にあるとしている。これに対し、言葉の音訓から日神が立たれた土地は日立国で常陸という表記になり、高天原の高は旧事紀で高国と記述あり、即ち**常陸国多珂郡**であるという。

※新井白石とは･･･江戸時代中期の旗本・政治家・学者。学問は朱子学、歴史学、地理学、言語学、文学と多岐に渡る。また詩人で多くの漢詩が伝わる。白石は号で、諱は君美（きみよし、有職読みで きんみ）。

常陸国多珂郡にある神社

1.御岩神社（賀毘禮神宮・斎神社）

御岩神社は**常陸国で最古**の神社。

■延喜式内本宮社

創建の時期は不明であるが縁起書等によると、天地開くる時よりこの霊山に鎮まるとある。また、古事記 日本書紀と並ぶ、我国最古の地方誌である「常陸国風土記」（七二一年）に太古よりこのかびれの宮に天つ神 鎮まると記され、同じく「三代実録」には「清和天皇貞観十六年（八七四年）「神階が県北地方最高位の 従四位下に進められた事が書かれている。「続日本後紀」「古語拾遺」等にも当神社の記事が出ており、特に「延喜式神名帳」（九二七年）には常陸久慈郡総社ともいえる薩都神社（里野宮）の本宮として常陸二十八社の一つと記されている。徳川家からは神地一八九町が寄進され水戸藩の出羽三山として隆盛をきわめた。

御岩神社

御祭神

国常立尊(くにとこたちのみこと)

大国主命(おおくにぬしのみこと)

伊邪那岐尊(いざなぎのみこと)

伊邪那美尊(いざなみのみこと)

他二十二柱

賀毘禮神宮

御祭神

天照大神(あまてらすおおみかみ)

邇邇藝命(ににぎのみこと)

立速日男命(たちはやひをのみこと)

神仏混合の寺社であり、阿弥陀如来、大日如来ばかりでなく、１８８柱もの神様がいらっしゃいます。

さらに御岩神社の奥には姥神社、稲荷神社、八大竜王までも鎮座しております。

まさに神々の国です。

斎神社

御祭神

天御中主神(あめのみなかぬしのかみ)

高皇産霊神(たかむすびのかみ)

神皇産霊神(かみむすびのかみ)

八衢比古神(やちまたひこのかみ)

八衢比賣神(やちまたひめのかみ)

御岩山霊場図

当山御岩山は古来より神々が棲む聖地として崇められてきた霊山であります。文献で初めて現れるのは、713 年編纂の「常陸國風土記」に「かびれの高峰(御岩山の古称)に天つ神鎮まる」と記され、考古学においても、それを裏付けるように、古代縄文人が神々を祀る祭祀遺跡等が発掘されております。

この霊場図は、中世より修験の山として栄えた名残ともいえるもので当山縁起の百八十八柱の神々がかかれており、県下最大関東有数の霊山であることがうかがえます。平地と隔絶した霊気漂う聖なる神域、御岩山はそういう特別な場所です。

日本神話について

1.概要

現在、日本神話と呼ばれる伝承はそのほとんどが、『古事記』、『日本書紀』および各『風土記』の記述をもとにしている。すなわち、高天原の神々を中心とする神話がその大半を占め、一方で、その出典となる文献は決して多くはない。

本来、日本各地にはそれぞれの形で何らかの信仰や伝承があったと思われ、その代表として出雲が登場するが、ヤマト王権の支配が広がるにつれてそのいずれもが国津神（くにつかみ）または「奉ろわぬ神」という形に変えられて「高天原神話」の中に統合されるに至ったと考えられている。また、後世までヤマト王権などの日本の中央権力の支配を受けなかったアイヌや琉球にはそれぞれ独自色の強い神話が存在する。

2. 神代神話の概略構成

①天地開闢

世界の最初に高天原で、別天津神・神世七代という神々が誕生。これらの神々の最後に生まれてきたのが伊弉諾尊（伊邪那岐命・いざなぎ）・伊弉冉尊（伊邪那美・いざなみ）である

②国産みと神産み

イザナギ・イザナミの両神は葦原中国に降り、結婚して大八洲と呼ばれる日本列島を形成する島々を次々と生み出していった。さらに、さまざまな神々を生み出していった。1部内容ではイザナギは黄泉の国へ向かいその後、黄泉のケガレを祓う為禊をし、この時もさまざまな神々が生まれた。

③アマテラスとスサノオの誓約・天岩戸

素戔嗚尊（須佐之男命・すさのを）は根の国へ行途中高天原へと向かう。天照大神（天照大御神・あまてらす）はスサノヲが高天原を奪いに来たのかと勘違いし、弓矢を携えてスサノヲを迎えた。スサノヲはアマテラスの疑いを解くために誓約で身の潔白を証明した。

しかし、スサノヲが高天原で乱暴を働いたためアマテラスは天岩戸に隠れた。そこで、神々は計略でアマテラスを天岩戸から出した。スサノヲは下界に追放された。

④出雲神話

スサノヲは出雲の国に降り、八岐大蛇（八俣遠呂智）を退治し、奇稲田姫（櫛名田比売・くしなだひめ）と結婚する。スサノヲの子孫である大国主（大己貴命・おほあなむち）はスサノヲの娘と結婚し、少彦名命（すくなひこな）と葦原中国の国づくりを始めた。

出雲神話とはいうものの、これらの説話は『出雲国風土記』には収録されていない。ただし、神名は共通するものが登場する。

⑤天孫降臨

アマテラスの孫である瓊々杵尊(邇邇藝命・ににぎ)が葦原中国平定を受けて日向に降臨した。ニニギは木花開耶姫(木花之佐久夜毘売・このはなさくやひめ)と結婚し、木花開耶姫は（主に）火中で御子を出産した。

⑥山幸彦と海幸彦

ニニギの子である海幸彦・山幸彦は山幸彦が海幸彦の釣り針をなくした為、海神の宮殿に赴き釣り針を返してもらい、兄に釣り針を返し従えた。山幸彦は海神の娘と結婚し彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊（鵜草葺不合命）という子をなした。ウガヤフキアエズの子が神日本磐余彦尊（神倭伊波礼毘古命・かんやまといわれひこ）、後の神武天皇である。

常陸国の歴史を推理

ここまでに調査した地質学的歴史と文献による歴史の内容を一旦整理し、そこから常陸国の歴史と日本創世について推理したいと思います。 まず、ここまでに解ったことを以下に箇条書きにします。

①常陸国北部（日立市周辺）の地層は、日本で一番先（約５億年前）に陸地になった。

②多珂郡は、山が険しく高いので、多珂国（たかこく）と名づけられた。

③常陸風土記に登場する歴史的な場所が現在も日立市内に多く存在している。

④古史通よると日本神話に登場する高天原は常陸国である。

⑤御岩神社には、伊邪那岐尊・伊邪那美尊・天照大神を含む百八十八柱もの多くの神々が祀られている。

この①～⑤の史実から、日本神話と常陸国の相違点を以下に示します。

相違点①　高天原という場所を指す地名と十王町高原

相違点②　十王町高原の近隣に御岩神社（日本神話に登場する神々が多く祀られている霊気漂う聖なる神域）がある。

相違点③　十王町高原の近隣に、竪破山に大きな岩（太刀割石）がある。この割れた岩こそが天の岩戸ではないのか？

相違点④　山幸彦と海幸彦の神話と常陸風土記に記述された内容の相違「野と海で獲物の幸を競うことになった」

相違点⑤　国産みと神産みで、イザナギ・イザナミは日本列島を形成する島々を次々と生み出していった。

地質学的にも、日本で一番先に陸になったのは、常陸国北部（多珂国）である。

また、イザナギ・イザナミ神は常陸国最古の神社（御岩神社）の御祭神である。

相違点⑥　出雲神話の八岐大蛇にまつわる神話は、出雲国風土記には収録されていないが、御岩神社の奥には、八大竜王が鎮座しており、隣の常陸太田市には、竜の形をした渓谷（竜神峡）がある。

竜神峡

このように、多くの相違点が日本神話と常陸国にあります。

常陸国は、多くの不思議と伝説がある由緒ある場所なのです。

私は、今回、インターネットで調査し記事を書きました。そのため地元にいながら行ったことがない場所が多くありました。

また、ずっと地元に住んでいながら日立市には歴史的なものがないと思っていたのですが、実は日本人にとってかなり歴史的に重要なものが多くあったことを知りました。

今後は、この多くの遺跡や寺社仏閣を実際に見歩きたいと思います。